

特集：入学

新入生の皆さんへ

廣田 充（筑波大学 生命環境科学研究科）

今春は例年になく肌寒い日が多く、春がなかったとか異常気象だなんて言う人も少なくありません。皆さんの中には、新歓コンパ等でこの寒さを体感した人も多いでしょう。そして、大型連休も過ぎた今頃になると、多くの方がつくばの諸々の環境に慣れたのではないのでしょうか。私もつくばに来て二回目の春を迎え、つくばの環境に慣れてきました。ただこのような文章を書くのは、教育経験が浅い私にとって初めてのことで慣れていません。ですので、上手に書ける自信はありませんが、私が今感じていることや新入生の皆さんに伝えたいことを率直に書いてみたいと思います。

大学というこれまでの学校とは一線を画す場所に来た皆さんに伝えたいこと、それは慣れることは重要だけど“慣れすぎには要注意”ということです。皆さんも良くご存じと思いますが、我々を含む生物にとって慣れることは様々な環境の中で生き抜いていくうえで不可欠です。慣れることが出来なければ、冒頭に書いたような状況も受け入れられず辛い思いをすることが多くなるでしょう。もちろん皆さんがこれからどっぷりと浸かることになる生物学の中でも、生物の環境に対する応答や環境に慣れること（順応や適応）は、主要な研究テーマの一つです。さらに一般社会においても、様々な環境に慣れて適応し、その中で高いパフォーマンスを維持することは、現代社会を生き抜くうえで必要な能力です。このようにみると、慣れすぎること悪くないように思えますが、私は良くないと考えています。

皆さんの中には入学時のドキドキ感が薄れる一方で、慣れつつある大学生活に面白さを感じなくなってきた人もいるかもしれません。私もそう感じた学生の一人でした。五月の大型連休が過ぎる頃には大学での日常生活がつまらなくなり、すぐに授業中はめったに見かけない学生の一人になっていました。しかし両親に苦勞をかけて行かせてもらった大学だったことや自分で学費を払っていたこともあり、なんとか自分が意味を感じることを見つけようと必死にもがいていたように思います。話が脱線してしまいましたが、このようにつまらなさを感じてしまうのは、慣れすぎの一つの弊害かもしれません。つまり、慣れすぎた生活は刺激が少なく面白みに欠けたものになってしまう可能性があるということです（これは私の趣向かもしれませんが）。もちろん強力な動機がある場合は違うと思いますが、そうでない場合は慣れすぎることには注意した方が良いでしょう。しかし、私が皆さんに注意を促すのはこの理由からだけではありません。

先に述べたように、周辺の状況と自分の立場を把握しつつその時の知識をフル活用して素早く“慣れること”は重要です。しかし、慣れすぎるとは、周辺の状況、自分の立場そして知識の変化から置き去りにされる危険があり、知らない間に“慣れない”状態に陥ってしまいかねません。さらに今日は、我々を取り

巻く周辺の状況や知識が、実に多様でかつとても速いスピードで変化していますので、ちょっと油断するとあっという間に置き去りになってしまうのです。絶対安心と言われていた企業が倒産したり、一国家さえ破綻したりするような時代であることや、科学の目覚ましい進歩によって次々と事実が塗り替えられる状況を思い浮かべれば、このことは容易に想像がつくかと思います。このような状況では、慣れた環境で安穩と過ごすのではなく、常に周辺の状況や自分の立場を把握しようとする、さらに常に新しい知識を得ようとする、ととても大切になってくると思います。

そのためにはどうすれば良いのでしょうか。私は、比較的自由な時間のある大学生のうちに今まで見聞きしたことの無いような経験を沢山することを強くお勧めします。本を読んで見聞を広めたり、色々なアルバイトをしたり、また今までにない位に勉強やサークルに打ち込むのも良いと思います。でも私が一番して欲しいのは、海外へ出ることです。目的地、移動手段、動機等は何でも構わないので是非海外に出て自分が体験したことの無いようなモノをいっぱい見て、触れて、感じて下さい。と同時に、これまではあまり意識しなかった日本という国や自分という存在を外からじっくりとみて下さい。それらの経験は、慣れることと正反対で戸惑いの連続かも知れませんが、物事や状況を客観的にみたり自分の考えを醸成させたりする際に必ず役に立つと思います。このようなことを頭の片隅に置きつつ、春先は少し寒いくばでの大学生活を思う存分謳歌して下さい。大学生活に慣れつつある皆さんが、様々な経験をしてドキドキ感が続くことを期待しています。

最後に、2010年度の日本国際賞を受賞した Peter Vitousek 博士が4月に日本で行った受賞講演の中で、私が最も印象に残った若者へのメッセージの一部を紹介したいと思います。Vitousek 博士は、学際的な分野である生物地球化学分野を開拓した第一人者です。非常に温和で笑顔の素敵な紳士で、若者へのメッセージを熱く語る姿がとても印象的でした。

“楽しいことばかりではないですが、全体を通してみれば苦しかった事も一つ一つが重要な過程であり、それらが充実した時間であったという事が後にきっとわかるでしょう”

Contributed by Mitsuru Hirota, Received May 10, 2010.